

29Cl-am08

2025年の超高齢社会が求める地域医療とは—薬学アドバンス教育の構築意義—
○串田 一樹¹, 廣原 正宜¹, 渡部 一宏¹(¹昭和薬大)

【はじめに】わが国の高齢社会は、戦後生まれの団塊の世代が、平成27年(2015年)に前期高齢者に到達し、さらに10年後には後期高齢者に達する。そして、高齢者人口が3,500万人に達すると推計されている。このように、2025年には超高齢社会が到来すると想定されているので、これからの地域医療は大変大きく変わる。今回、超高齢社会の2025年を迎えるに当たって、薬局は医療提供施設として、また、薬剤師は医療の担い手としてどのように変わっていくのかを検討し、このような社会に対応できる薬学アドバンス教育の一例を報告する。

【調査方法】薬学教育モデル・コアカリキュラム、および厚生労働省の各種資料、演者のフィールド調査資料等を参考に、薬学アドバンス教育について検討した。

【高齢社会の到来】国の高齢化の将来推計では、2025年には高齢化率が30%を超え、65歳以上1人を生産年齢2人で支える状況になり、医療提供体制は構造的に検討する時代になる。さらに、認知症高齢者数が300万人を超す見通しであることから、薬物治療における情報提供や服薬支援などにも大きな負担が生まれ、薬剤師にも高齢者に対応できる臨床的な資質が要求される。

【薬学アドバンス教育】薬剤師は高齢者の薬物治療に対して、薬の適正使用によるリスクマネジメントの確立とともに、患者が固有に有する尊厳に対して配慮できる資質が必要である。実務実習終了段階からコースを設け、一例であるが、在宅医療におけるチーム医療のコースでは、調剤から訪問同行に至る患者ケア全般に関わる実習を構築した。6ヶ月間を想定しているが、薬剤師が調剤だけではなく、チーム医療の中で薬を中心に患者の療養全般にかかわり、入院から在宅へのシームレスな医療提供者の一員であることを理解してほしいと考えている。